

# 世紀轉換期フランスの史学論争(一)

渡 辺 和 行

## 目 次

- 一 はじめに
  - 二 実証主義史学への挑戦
    - (一) 社会学からの批判
      - (1) エミール・デュルケーム
      - (2) フランソワ・シミアン
    - (二) 歴史哲学からの批判
      - (1) 方法の探究
  - 三 歴史学と社会学との論争
    - (三) ランプレヒト論争とフランス
  - 四 むすび
- (2) シャルル・セーニョボス
  - (3) ポール・ラコンブ
  - (4) A・D・クセノポール(以上本号)
  - (5) アンリ・ベール

## 一 はじめに

社会史パラダイムの成立を見るうえで、一九世紀末から二〇世紀初めの時期の重要性については、贅言を要すまでもない。勿論、この時期に新しいパラダイムが出現したというのではない。社会史パラダイムが制度化するためには、リュシアン・フェーヴルによる「歴史のための闘い」を必要としたからである。しかしこの時期に、理論面では「歴史理論の批判的かつ実りある再検討」<sup>(1)</sup>がなされたことや、実際面でも、政治史や外交史を中心とした歴史から経済史・文化史・社会史をも含めた歴史研究の「アプローチの多様性」<sup>(2)</sup>が生じたことを看過すべきではないであろう。

そもそも文献考証や史料批判に基づく政治史（ランケ・パラダイム）は、一九世紀後半に、学問としての歴史学を探究する歴史家の意志と、ナショナリズムを動員して国家の統一や近代化を達成しようという国家意思との一致<sup>(3)</sup>によって凱歌を挙げたのであった。フランスにおいては、それは科学と民主主義の同盟、歴史学と共和政との同盟として現われた。ところが勝利したランケ・パラダイムも、政治問題から経済・社会問題への課題の変化、社会学や心理学という新興科学の出現、唯物史観に依拠するマルクス主義の影響などによって批判に晒されるようになったのである。<sup>(4)</sup>この批判から歴史論争が生まれ、歴史学の再生が始まるのである。このかんの歴史学の変貌のプロセスを、われわれは、オーラルからジョレスやルフエールにいたるフランス革命史研究のなかに窺うことができる。<sup>(5)</sup>それは史料に基づく政治史から経済や階級を中軸としたマルクス主義的歴史、さらに先駆的な心性史への移行として要約される典型的なプロセスであった。つまり、ランケ・パラダイムに代わる新しい社会史パラダイムへの過渡期として、この時期がクロース・アップされてきたのである。今日、この時代に国際的な関心が注がれるゆえんである。<sup>(6)</sup>

フランスの現代歴史学の成立という見地からも、この時期の史学論争は重要性を増している。このような視点からアプローチした邦語文献に、井上幸治、本池立、両氏のモノグラフがある。<sup>(7)</sup> 本稿は両氏の業績をふまえ、この時期のフランス史学の状況を、ドイツ史学の状況を視野にいれつつ分析することを目的としている。なぜなら、ランケ・パラダイムを事実探求方法として、実証主義的に理解し摂取したフランス歴史学も、この時期には、瑣末主義に陥り、それを克服する道が模索され始めていたからである。ドイツのランプレヒト論争ほど著名でも大規模でもないが、同時期のフランスでも同様の方法論争が展開されていたからである。この方法論争は、歴史学方法論の根本的な方向性を打ちだせなかったとはいえ、のちの仏独両国の歴史学の発達に大きな影響を及ぼすことになるであろう。筆者の基本的モチーフや実証主義史学を捉える視点については、前稿を参照していただきたい。<sup>(8)</sup>

- (1) Fritz Stern, *The Varieties of History from Voltaire to the Present* (London, 1970) © 1956, p. 20.
- (2) Georg G. Iggers, "The *Methodenstreit* in International Perspective. The Reorientation of Historical Studies at the Turn from the Nineteenth to the Twentieth Century", *Storia della storiografia*, No. 6 (1984), 30.
- (3) スターンはこの二つを、「近代のすべての歴史家に影響を及ぼした二つの基本的趨勢」と呼んでいる。Stern, *op. cit.*, p. 11.
- (4) Jean Ehrard et Guy P. Palmade, *L'histoire* (Paris, 1964), pp. 82-84. 歴史家へのマルクス主義の影響は、「アンリ・オーゼルに見られる。経済史を専門にしていたオーゼルは、「カール・マルクスと史的唯物論の理論の影響を被らない者はいない」と述べていた。Henri Hauser, "Des divers sens de l'adjectif social," *Revue internationale de l'enseignement*, XLIII (1902), 24.
- (5) 前川貞次郎『フランス革命史研究』(創文社、一九五六年)第七章。G・ルフェーヴル『革命的群衆』二宮宏之訳(創文社、一九八二年)。
- (6) 一九八三年七月に、歴史学方法論史国際委員会は、この時期の歴史学方法論についての世界大会を、フランスのモンペリエで開催した。

(7) 井上幸治「アナール学派の成立基盤」『歴史評論』三五四号、一九七九年。本池立「『アナール』への道」『思想』七〇二号、一九八二年。

(8) 渡辺和行「一九世紀末フランス史学を見る眼について」『香川法学』第七卷第二号、一九八七年。カルボネルは、今世紀の「新しい歴史家」によって否定的かつ侮蔑的に用いられる「実証主義史学」の定義を鵜呑みにする怠惰な精神を批判し、一九世紀後半のフランス歴史学の複雑さについて繰り返し論じている (Charles-Olivier Carbonell, *Histoire et historiens 1865-1885*, Toulouse, 1976, pp. 401-408, Do., "L'histoire dite positiviste en France" *Romantisme*, Nos. 21-22, 1978, Do., "Histoire narrative et histoire structurelle dans l'historiographie positiviste du XIX<sup>e</sup> siècle," *Storia della storiografia*, No. 10, 1986). 筆者もカルボネルの議論に賛成であり、かれの論点 (histoire positiviste と histoire positive との区別) をふまえたうえで、筆者は「実証主義史学」という語を用いていることを付言しておきたい。実証主義の語義については、渡辺和行「フランス実証主義史学の成立とガブリエル・モノー」『香川法学』第六卷第四号、一九八七年、を参照されたい。

## 二 実証主義史学への挑戦

### (一) 社会学からの批判

実証主義史学への批判は、まず新興の社会科学たる社会学の領域からなされた。社会学の学問的成長は、歴史学と社会学との関係という新しい問題を、歴史家につきつけたのである。一八九〇年代に、ポール・ラコンブ、セーニョボスとラングロワ、クセノポル、アンリ・ベールなどが、歴史の方法についての書物を出版した背景には、このような学問的事情があったのである。<sup>(1)</sup> それではなぜ、社会学は批判者の位置を占めえたのであろうか。

## (1) エミール・デュルケーム

周知のように、社会学は当時、誕生したばかりの学問であった。社会科学系ディシプリンの導入を、高等教育改革の目玉商品として位置づけるといふ社会的好条件は、たしかに存在した。<sup>(2)</sup>しかし新たに生みだされるディシプリンが共通して体験するように、社会学もまた「生れ出づる悩み」を抱えていた。<sup>(3)</sup>われわれはデュルケームの苦闘のなかに、その悩みを看取することができる。しかしこの苦闘があったからこそ、社会学の基盤は磐石となり、隣接領域の学問の性格に関するデュルケームの洞察も深まったのである。<sup>(4)</sup>この時期のデュルケームの労力は、社会学が独立科学として存立しうることの論証に費された。かれは、社会学が独自の研究領域と固有の研究対象をもつことを明らかにし、その対象を分析する研究方法の考察に邁進したのである。新しいディシプリンを創出するという点では、ガブリエル・モノーと労苦を共有する面もあったが、デュルケームの仕事はモノーの仕事以上に厳しいものであった。というのは、歴史学は「過去における人間の行為」という厳然たる研究対象をもつのにたいして、社会学はそれをまず明らかにせねばならなかったからである。われわれは社会学の制度化を志向するデュルケームの知的営為を、一八九〇年代の一連の業績のなかに窺うことができる。かれの努力は、『社会分業論』(一八九三年)、『社会学的方法の規準』(一八九五年)、『自殺論』(一八九七年)、『社会学年報』(一八九八年)として結実したのである。このようにデュルケームは、方法の問題、すなわち、社会学の存在論と認識論という学問の基礎づけの問題に敏感であったからこそ、歴史学が抱えている方法論的諸問題をも観察しえたのである。それでは、デュルケームの歴史学批判に耳を傾けてみよう。<sup>(5)</sup>

社会学の確立をめざしたデュルケームにとって、歴史学との関係は避けて通ることのできない問題であった。フランス社会学の始祖であったオーギュスト・コントが、すでに、社会動学の要として歴史を重視していたし、デュルケームが高等師範で師事した歴史家のフステル・ド・クラランジュも、「真の社会学は歴史学である」<sup>(6)</sup>と道破していた

からである。デュルケームも「歴史的な一切は、社会学的である」<sup>(7)</sup>と記したように、かれが求めた社会学と歴史学との関係は、緊密な相補的關係である。「これら二つのディシプリンが、一つの共通のディシプリンに融合する運命にある」<sup>(8)</sup>とすら主張しているのである。しかし『社会学年報』を創刊した一八九八年に、デュルケームは「今日でも社会学的研究に関心をもつ歴史家は稀である」<sup>(9)</sup>と述べざるをえない状況であった。デュルケームの目に映った歴史学とは、「子供の初期の段階にある歴史学」、すなわち、「なんら理論による結びつきをもたない事実の収集」の段階の歴史学であった。<sup>(10)</sup>『古代都市』を著わしたフュステル・ド・クラランジュのもとで歴史を学んだデュルケームは、たんなる事実学に堕した素朴実証主義を批判するのである。歴史学も社会学から知的刺激をえて、科学とならなければならぬのである。歴史学は、社会学の方法、すなわち、諸事実の比較によって類型や法則を導きださんとする社会学の方法を、学ばねばならないというのである。なぜならデュルケームの見地では、歴史学は比較による説明をとおしてのみ、科学たりうるからであった。<sup>(11)</sup>もつともデュルケームも、一方的に歴史家を指弾したのではない。歴史家にのみ責任を転嫁しえない理由として、デュルケームは、社会学の側の責任とフランスの大学制度の欠陥という二つを指摘している。それは「歴史学が社会学にたいしてしばしば示してきたあの不信の原因」の一半が、事実を軽視しがちな社会学の側にもあったことを認める発言となつて表われたり、<sup>(12)</sup>正規の学生をもたないために、科学的な方法や厳格さよりも雄弁を喜ぶ一般聴衆を対象とした文理学部<sup>(13)</sup>の公開講義に弊害があることの指摘や、<sup>(14)</sup>歴史学者がこれまで「科学的というよりは文学的な教育をうけてきた」<sup>(14)</sup>ことの指摘となつて表われているのである。

ともあれデュルケームの歴史学批判、デュルケームの歴史観は、一八八七年にボルドー大学で行なった「社会学講義——開講の辞」のなかに見てとることができる。やや長いが、その一節を引いておこう。

歴史学者は普遍化を目的とする学者でないことを私はよく知っている。歴史学者の特別の、独自の役割は、法則

を発見することではなく、各時代、各民族にその特有の個性と独自の特徴を明らかにすることである。かれの領域は特殊性のそれであり、そうであるべきである。しかし最後に、かれの研究する現象はいかに特殊であれ、かれはそれらを記述するだけに満足せず、それらを相互に結びつけ、その原因と条件とを探求するのである。そのため、かれは帰納を行ない、仮説をつくる。もしかかれが経験的にのみことをすすめ、試行錯誤するだけで社会の本質、その機能、機能間の関係についての何らかの概念によって導かれなければ、どのようにして時々道を誤ることから免れることができよう。その網の目が大規模な社会の生活を構成している事実の巨大な総量のなかにあつて、かれはどのように選択をするであろうか。それらの事実のなかには、日常生活の些細な出来事として以外何の科学的意義のないものもある。もしかかれがそれらを全部無差別にうけいれたら、かれはむだな博識に陥るだけである。かれはごく小範囲の博識家の関心をよぶことはできようが、有用な、生命のある業績をつくることは不可能である。ところで選択をするためには、指導的概念、規準が必要であつて、それは社会学にしか求めることはできない。社会学は歴史家にたいして社会の根本的な機能、本質的機能が何であるか、を教えるであろうし、歴史家がとくに努めて向かおうとするのはこれらの機能や機関の研究である。社会学は歴史家の研究を限定し、指導する問題を提起するであろうし、反対に、歴史家は社会学に回答の要素を提供するであろう。こうして二つの学問は、この好意的な奉仕の交換という便宜によって相互に利益を得られこそすれ、損をすることはないであろう。<sup>(15)</sup>

引用にも明らかなように、デュルケームの歴史学批判の骨子は、歴史学は個別的な歴史現象の記述科学にとどまることなく、帰納や仮説や比較の活用によつて、説明科学にまで高められねばならないものである。無限に存在する経験的事実のなかから、ある事実を選択する規準を歴史学はもつ必要があり、その規準を歴史学に与えうるもの

こそ、社会学であるというのである。歴史学を社会学に包摂せんとするこの大望は、のちに「社会学（帝国）主義」とか「各々の学問の存在理由を認めないで他の学問に自分の優位を認めさせる」という批判を招くことになるが、むしろこの時点では、社会学の制度化に賭けるデュルケームの意気込みの表われと解するべきであろう。

ともあれデュルケームの歴史学批判は、あくまでも社会学の擁護という観点からなされたのである。それはデュルケームのセーニョボス批判に明らかである。デュルケームは『社会学年報』のなかで、セーニョボスの『社会科学に應用された歴史の方法』をとりあげて、批判を加えたのである。<sup>(17)</sup>デュルケームは、セーニョボスが歴史を社会科学の中心におき、しかも歴史を主観的構築物に還元していることを批判する。このようなセーニョボスの見解は、三年前の『歴史学入門』のなかに散見されたものであった。そのなかでセーニョボスは、「歴史は、その資料の性質そのものにより、必然的に主観的科學である」とか、「歴史は、今なお形成の途次にある政治的な社会的諸科學の完成にも不可欠のものである」と述べていたのである。しかもデュルケームにとって、「幾人かの社会學者によつて認められてゐる『社会的事實』というのは、哲學的構成物であつて歴史的事實ではないのである」というセーニョボスの一文は、デュルケーム社会学の根本概念を否定するものであり、とうてい座視しえなかつたはずである。<sup>(18)</sup>そこでデュルケームは、セーニョボスの誤りを、社会科学概念の誤解にあるとみて、自己の社会科学（＝社会学）論を展開したのである。しかしデュルケームといえども、史料批判や歴史批判の方法の重要性を認めており、この点ではセーニョボスを肯定的に評価するのである。

またセーニョボスとラングロワの『歴史学入門』を書評したドミニク・パロディも、歴史學の科學性や歴史學と社会学との關係についてのセーニョボスの見解に批判を放った。<sup>(19)</sup>パロディは、歴史學が獨立科學であるというセーニョボスの主張を否定し、歴史學は個別事象を取り扱い、社会科学に素材を提供する「宝庫」であり、歴史學と社会学と



は結合してこそ、「完全な科学」となると主張するのである。デュルケームと同じ観点からの批判である。

(2) フランソワ・シミアン

ところで、ヴィクトール・カラディが、デュルケームの学問的生涯を「半挫折 *semi-échec*」<sup>(20)</sup>と捉えたように、一八九〇年代には、社会学の制度化を阻む空気も強かった大学社会<sup>(21)</sup>にあって、デュルケームの歴史学批判が、どれほどのインパクトをもちえたのか疑問なしとしない。歴史家のジョルジュ・ルフェーヴルも、デュルケームミアンの歴史の取り扱いは、ある歴史家の結論を既定のもの<sup>(22)</sup>と見なしたり、文献を批判的研究もなしに利用するという間接的なものであったと述べている。デュルケーム社会学に好意的なポール・ラコンブも、社会学者はこれまで未開に専念しすぎており、開化した民族についての研究の蓄積は不十分であると考えていた。<sup>(23)</sup>デュルケームは、歴史的遡及法ないし遡源的方法について語っているが、かれの関心が個別的事実よりも類型や法則に、歴史そのものよりは、法・道德・宗教・家族・教育といった領域にあったことも、デュルケームの歴史学批判の鋭さを鈍らせたと思われる。歴史学批判の点でデュルケームより犀利であったのが、社会経済史に関心をもっていたフランソワ・シミアンである。実証主義史学への批判の鋭さと、リュシアン・フェーヴルを始めとして、若い歴史家に与えた影響の大きさという点で、シミアンを逸するわけにはいかない。<sup>(24)</sup>

当時、三〇歳の若き哲学のアグレジェであったシミアンは、「歴史の方法と社会科学——ラコンブ氏とセーニヨボス氏の近著についての批判的研究——」と題する論文を『歴史総合評論』(一九〇三年)に掲載し、<sup>(25)</sup>「歴史家をおおいに困惑させる戦い *une campagne* を、歴史家にたいして始めた」<sup>(26)</sup>ところであった。一九二二年以来しばしばフェーヴルが引用し、一九六〇年に『年報——経済・社会・文明』が再録したことによって有名になった論文である。<sup>(27)</sup>

シミアン論文のテーマは、「伝統的歴史学と新しい社会科学」との関係である(p.1)。立論の前提をなすライトモチーフは、社会現象を研究する社会科学も、間接的認識の方法である「歴史の方法」に依存せざるをえないが、歴史家と社会学者との間には、歴史の構成の段階において分岐が存在しており、この分岐に関する認識論的諸問題を考察する必要があるというものであった(pp.2-3)。シミアンが依拠するのは、勿論、「実証科学」の立場である。それは本来の意味での、自然科学的な実証主義の立場である。このような見地からシミアンは、「伝統的歴史学」の方法論が、実証的社会科学の方法を認めていないことを指弾し、「伝統的方法を、科学的説明を可能とする人間現象の実証的客観的研究に代えること」を、「新しい世代の仕事」であると位置づけたのである(p.157)。

シミアンが批判の対象としたのは、概説史をもつぱらとする「歴史のための歴史家 *historien historisant*」(p.3)の思想と実践である。サブタイトルによると、ラコンブとセーニョボスの二人が批判の俎上にのせられていることになっているが、社会学の方法の摂取を主張していたラコンブには好意的評言がなされており、標的はセーニョボスであった。シミアンは、セーニョボスの原子論的社会観・原因概念・歴史の構成方法・事実の分類などを、逐一、批判したのである。このようなシミアンの批判は、他のデュルケミアンと比べても、その批判の広さと深さの点で際立っていると言いうる。

シミアンが、セーニョボスの主観的心理主義的な歴史観や原子論的な社会把握を批判したのは、セーニョボスの立場は、実証科学の否定につながるという認識があったからである。シミアンにとつてもデュルケムと同様に、「社会的事実」・「社会的要素」・「社会現象」は心理的かつ主観的なものではなくて、客観的かつ集合的に実在するのであった。であるがゆえに、「実証科学の役割は、主観から客観を取りだすこと」(p.6)になるのである。そのための方法的道具としてシミアンが利用するのは、セーニョボスが否定した抽象・概念・類型の積極的使用である(p.10, p.148)。

こうして「社会現象の客観的考察」をめざす『社会学的抽象』が、規則性・法則性・科学的・説明に導くかどうかを研究する」(p. 12. 傍点、イタリック)ことが、重要な問題となるのである。この点こそ、「伝統的歴史学の精神」とシミアンたちとの分岐点なのである。

このような方法上の相違を生む基底には、歴史の説明に関わる「原因概念」の相違が横たわっていた。シミアンは、セーニョボスが必要条件や十分条件を原因と混同していること、誘因による説明で満足していること、社会現象の原因を個人のモチーフに還元することを批判したのである(p. 14-17)。それにたいして、シミアンが提示した「原因概念」は、J・S・ミルに依拠した厳密に実証的な概念であった。シミアンによれば、「現象の原因とは、不変で無条件的な前件現象」のことであり、因果関係とは「安定した関係、規則性、法則」を意味していた(p. 17)。この定義に従えば、反復する事実や規則的なものが注目され、特異な事実や偶然的なものが退けられるのはコロラリーであろう。セーニョボスやアンリ・オーゼルがドイツ史学から摂取した説明原理としての「社会的連関“Zusammenhang” social」も、この観点から批判されることになる。シミアンは、「社会的連関」が有効性をもつのは、研究を一つの社会に制限することなく、複数の社会との比較や論理的抽象の操作によって、その連関に同一的で規則的な関係があることを明らかにしえた場合のみであり、そのときには、その連関は因果関係をもちうると主張するのである(p. 134-138)。

また事実を引きだす資料 document についても、シミアンは、資料の主観的性質を認めるが、研究が事件や意図ではなくて、制度や現象間の客観的關係に向けられるなら、資料は主観性を減殺しうることが述べられた(p. 21)。

「歴史の構成」については、シミアンは、事実の収集から構築にいたるまでを司る枠組の重要性を指摘する(pp. 131-133)。その枠組とは、「構成的仮説」(p. 148)のことである。伝統的歴史学に不足しているのは、資料ではなくて「構成的精神」なのである。重要なのは材料ではなくて、「精神の方向」であり、この「精神の方向」をこそ変ねばならな

い。なぜなら「材料は、精神によって構想され抽象され分類され整序されてはじめて、存在する」からである(p.151)。「探究的分析は、科学の建設的総合に従い、同時に、総合は、分析に基づき、分析に支えられつつ構築されるのである。」(p.148)のようにシミアンは、歴史における総合の重要性および総合と分析の不可分の関係を述べ、伝統史学の「三つのイドラ」との闘いを呼びかけたのである(pp.154-156)。第一に、事件の歴史である政治史を中心に置く政治のイドラ、第二に、歴史を制度や社会現象との関わりからではなく、個々人の歴史として考える個人のイドラ、第三に、各時代を等しく重要と考え、歴史をすべての部分が同じように作成された切れ目のない巻物と理解する年代学のイドラである。

以上のように、伝統的歴史学の欠陥を剔出したシミアン論文は、大きな反響を惹き起こし、のちの歴史家と社会学者との論争の契機となったのである。

## (二) 歴史哲学からの批判

実証主義史学への第二の批判は、伝統的な人文科学たる歴史哲学の領野から放たれた。アンリ・ベールの批判がそれである。H・ベールは、当時、三〇代という若さであった。そのこともあつてか、かれの挑戦は、総合を時期尚早と考える歴史学からは無視され、膝下の哲学からも哲学本来の領域から外れた仕事として黙殺された。しかし『歴史総合評論』を主要な活動の場としたベールの努力が、アナール学派の第一世代を育んだことは、今日では周知の事実である。フランスの現代歴史学の成立という見地からも、ベールに関心が注がれるゆえんである。ここでは、もう少し広い視野から一八九〇年代の歴史学の状況を検討しよう。ベールの伝統的歴史学批判を見る前に、ほぼ同時期に出版された歴史学方法論の著作を一瞥しておきたい。転形期の実証主義史学をめぐる議論の状態と、そのなかから呱呱

の声をあげた『歴史総合評論』の背景を知るためにも、それは不可欠な作業であるからである。

# (1) 方法の探究

一八六〇年代から始まった歴史学の科学化が、精緻な文献考証や厳格な史料批判の方法によって促進されたことについては多言を要しない。それは、フュステル・ド・クラランジュの個人的才能、高等研究院第四部の組織的努力、『歴史・文学批評雑誌』や『史学雑誌』による方法の喧伝と監視などに負っていた。しかし、いざ考証や批判の具体的方法となると、それぞれの歴史家の判断と能力に任されており、体系化されたマニュエル manuel は存在しなかったのである。ましてや歴史の構成方法や歴史認識の客観性といった科学方法論的な考察は、欠落していたと言わざるをえない。なるほどバックルやテーヌは自著の一卷ないし一章を歴史哲学的考察にあてており、その重要性は否定しない<sup>(28)</sup>。しかし一八八〇年代の後半まで、ここで検討に値するような歴史学の認識論的諸問題を考察した本格的な書物が著わされなかったという事実が、何よりも理論や方法の欠如を雄弁に物語っている<sup>(29)</sup>。この問題が歴史家の一部に自覚され始めるのが、一八八〇年代であったのである。実証主義史家が「方法論学派」<sup>(30)</sup>と形容される理由も諒解しうるであろう。それは、方法の欠如を自覚し、方法を希求したかれらの学的態度を表現しているのである。

かくして方法の探究が始まる。それはまず、歴史学の隣接領域から始められた。一八八六年に理工科学学校の出身であるポール・ムージュオル Paul Mougeolle が『歴史の諸問題』を著わし、一八八八年には哲学者のルイ・ブルドー Louis Bourdeau が『歴史と歴史家——実証科学として考えられた歴史についての批判的試論——』<sup>(31)</sup>を著わした。ムージュオルの著書は、歴史哲学の領域に属する本であり、ブルドーの著書は、歴史学方法論の領域に属する本である。両者はともに本職の歴史家ではなかったし、かれらの著書が今日まで影響を及ぼしているわけでもないが、かれらの

議論は、一九世紀末から二〇世紀初頭の方法論争に接続していったがゆえに、無視することはできない。かれらはともに、進歩史観と本来の意味での実証主義に依拠し、統計学を重視するなどの共通点も多い論を展開している。今少しく両者の歴史論を見ておくことにしよう。

ムージュオルが「歴史に環境の影響（という考え）を導入した最初の近代人はフランス人である」（p.432）と誇示したように、かれの歴史哲学は、ヘーゲルのそれではなくて、ジャン・ボダンやモンテスキューの衣鉢を継ぐものであった。それはかれが、遺伝や種族をキー・ワードとした生物学的理論を拒否し、環境を重視した地理学的歴史観を展開したところに示されている（第二部第三編および第三部）。かれの見るところ、種族理論では「社会集団間や同一集団の階級間の不平等の起源」を明らかにしえないからである（p.231）。もつとも、かれの理論は、高度や緯度と文明の発達の間を法則として提示したり（第一部第三編）、英・独・仏三国の歴史学や生物学の力点の相違を地形や気候や風土に求める点で（第四部）、地理的決定論という欠陥をもっていると言いうる。このような欠陥を認めたくえでなお重要なのは、ムージュオルの素朴実証主義批判である。かれの基本的な立場は、本来の意味での実証主義であり、進歩史観であった。それはかれが、「偶然的变化は人類史では重んじられない」（p.327）とか、「法則が人類を支配する」・「社会は法則に従う」（p.43）と断言したり、「歴史学は十分に進歩していないので、今後、社会の進化を詳細に描写しえない」（pp.222-223）と記しているところに窺うことができる。ムージュオルはこのような見地から、「法則の歴史 l'histoire de la règle」を目ざさない「偶然の歴史 l'histoire de l'accident」を指弾するのである（p.38）。かれはこれまでの歴史は、いわば頂上の探検にとどまっており、光も射さない峡谷を冒険する気もないと比喻をまじえて批判した（p.223）。かれが批判する「偶然の歴史」とは「戦闘史 l'histoire-bataille」のことであり、「事実間の関係」という忍耐のいる研究に専念しないで、奇妙な偶然の一致や突飛な関係に注意を向ける「歴史であった」（p.38）。「歴

史においては、変則的なものや偶然は主要な役割を演じない」(p. 414) と考えるムージュオルが、国王・予言者・征服者・立法者などの歴史上の偉大な個性を過大評価しないのは当然である(第二部第一編)。かれは、個人・異常・例外を退け、大衆・通常・法則を対置するのである。それでは、かれの言う「歴史法則 *une loi historique*」とは何であろうか。それは第一に「事実の全体」、第二に「時間と空間といった壮大な変数」の二要素の関係と要約される(p. 97)。事実間の関係とは因果関係のことであり、時間と事実との関係の中心をなすのは「進歩」思想であり、空間と事実の関係として提示されるのは地理学的法則である。かくして地理学的歴史観が展開されることになる。かれは統計の利便によつてこそ、「これまで例外の研究でしかなかった歴史は、法則の研究となるであろう」(p. 197. その他 p. 41, p. 43) と、統計を用いた新しい歴史について語りもするが、地理的決定論へと大きく傾斜するのである。

以上のようなムージュオルの歴史論は、世紀末にクセノポールによつて批判されることになる。とりわけムージュオルの生物学的理論の拒絶や地理的歴史観をクセノポールは批判するのである。<sup>(32)</sup>しかし批判と同時にクセノポールは、ムージュオルの書物から、のちのかれの理論的展開にとつて有益な着想を得たと推測される。それは、ムージュオルの時間と空間による事実の二分法や「歴史系列 *les séries historiques*」(p. 89) という考えである。勿論、後述するように理論化の度合はクセノポールの方が高いのであるが、『歴史の諸問題』がクセノポールに刺激を与え、のちの史学論争に繋がったという点で、ムージュオルに論及する価値があつたのである。

ムージュオルの書物が出版されて二年後に、本来の意味での実証主義に基づく歴史理論を構築しようとしたのが、正統派のコント主義者であるブルドーであつた。<sup>(33)</sup>かれは『歴史と歴史家』を、「歴史は作り直されねばならない。いやむしろ、歴史はまだ作られていない」(p. 1) という大胆な主張で始めた。かれは歴史が科学として位置づけられるためには、次の四条件を満たす必要があると述べる。第一に、対象が明確に定義されること、第二に、解決すべき問

題が合理的プログラムを構成すること、第三に、真理を明らかにする方法をもつこと、第四に、獲得された知識が法則として定式化されることである(以上、p.1)。ブルドーは、現在の歴史学がこの条件を満たさないことを批判し、この条件を満たす歴史理論を展開したのである。

素朴実証主義の批判という点で注目には値するのは、次の諸点である。かれはこれまでの歴史が、英雄やエリートという個人と有名な事件のみを対象としてきたことを徹底的に批判する。かれは「人間の一般性を観察しないで人物しか見ず、理性の働きを探らないで出来事を物語るにとどめる」歴史家を批判するのである(p.12)。かれにとって、偉人や事件は一時的価値しかないのである。なぜなら「労働者のいない発明家、公衆のいない芸術家、弟子のいない学者、兵士のいない將軍、臣下のいない王、信者のいない予言者、かれらは皆、その役割を失う」からである(p.107)。すなわちブルドーは、これまでの歴史が大衆 *foule* や民衆 *peuple* を無視してきたことを批判したのである(第一編第二章)。かれが対置する歴史は、「非個体的・一般的」性格の歴史(p.109)、換言すれば、全体的・社会的な歴史であった。それは「代々の人口動態や富の状態を確認し、それらの増減の原因を証明し、嗜好の変化・科学の進歩・習俗の改良・公的自由の拡大を説明する」歴史であり、「衣食住の歴史、芸術・思想・道德の歴史」であった(pp.126-127)。このような主張の理論的根拠を示すために、かれは諸事実を「出来事 *événements*」と「関数 *fonctions*」という二種類に分類することを提言する。前者の事実、偶然的で一時的な例外の事実であり、後者の事実、規則的で連続的な共通の事実である(p.110)。これら二種類の事実の関係については、ブルドーは「出来事は関数の特殊な場合でしかない」と述べる(p.132)。そして「出来事の物語に満ちた歴史」が、例外の事実を重要視していることを非難し(p.111)、「いかなる偶然も研究に値しない」(p.122)、「関数的事実の研究こそ、人間生活の認識にとって最も価値がある」と断定し、歴史における原因の究明においても、「出来事を関数に従属させる」ことを主張するのである。



(p.131)。なぜならブールドーには、規則的事実こそ「科学研究の真の対象」であり (p.123)、「実証的歴史」は「個体的・断続的・不規則的なものではなくて、普遍的・漸進的・連続的なもの」を対象とするという認識があるからである (p.94)。「漸進と連続の法則は理性の発達を支配する」(p.28) という基本的な考え方があったのである。「歴史は理性の諸発達の科学である」(p.5)とか、「歴史の対象は、理性が導き、理性が影響を被る諸事実の普遍性を含まねばならない」(p.11) という歴史の定義も、ここから生まれるのである。

ここまでブールドーの主張を検討してきたわれわれは、かれが歴史の方法として「数学的方法」を提出しても驚かないであろう。ブールドーは「数学的方法是は物語的方法にとって代わるべきであり、数学によって物語を置換すべきである」(p.289)と主張する。なぜなら「科学の永遠の公準たる確実性が、物語史には欠けている」からである(p.281)。数学的方法とは統計的方法のことである。かれにとって統計学は、「数字によって表わされた社会的事実の科学」であった(p.289)。この点については、ブールドーはムージュオルよりも詳細な議論を展開しており、「統計による歴史学の革新」(pp.317-324)を要求し<sup>(34)</sup>えするのである。このようにかれが、数学との「親密で豊かな同盟」を結ぶように歴史学に要請するのも (p.291)、歴史は法則を打ちたてる能力を証明することによって科学として認められると考えているからである (p.328)。それではかれの考える法則とは何であろうか。かれは法則を、一般法則と特殊法則に区分し、さらに特殊法則を秩序の法則と関係の法則に細分する。一般法則とは進歩の法則であり、その数学的公式化が企てられもしている。特殊法則のなかの秩序の法則とは、事物の類似性に関わる法則であり、関係の法則とは事物の変化に関わる法則である。秩序の法則では統計が重視され、関係の法則では因果が重視される(第四編第二章)。ブールドーはこれらの法則によって、特異な事実も予測の可能性を高めると記すが、基本的には「法則が支配する体系においては、偶然が存する場所はない」(p.341)という考えであった。

以上のような特徴をもつブルドーの歴史理論は、本来の意味での実証主義的歴史理論と言いうる。かれの理論は、偶然・事件・個人を退け、法則・統計・大衆を重視する。それは史料実証主義とは対蹠的なものであった。<sup>(35)</sup>かれの理論への賛否は別として、ブルドーが、アナール学派より半世紀以上も早く、「事件史」に反対して、「全体史」・「日常生活史」・「数量史」・「非個体的歴史」を主張した点は承認されねばならないであろう。

ブルドーの著書が、どれほどの影響力をもったのかを判定する材料を、筆者は残念ながらあわせていない。セーニョボスやクセノポールが批判的に引用しているのは、後述する理由から当然としても、不可解なのは、共通点も多いと考えられるラコンブやシミアンがまったく引用していないことと、H・ベールも一八九〇年の書評以外には、三箇所<sup>(36)</sup>で控え目に引用する扱いにしていることである。不明のまま残さざるをえないが、一八八八年にブルドーの文献が出版されていたことを、われわれは記憶に留めておこう。

ところで同じ時期に、本職の著名な歴史家の間で論争がなされていた。ガブリエル・モノーとフステル・ド・クルランジュとの間で、「比較」か「分析」かといった論議が展開されたのである。<sup>(37)</sup>それはモノーが、フステル・ド・クルランジュの歴史解釈に疑問を提出したことによって始まり、「早まった比較は、歴史に多くの誤りをもたらし<sup>(38)</sup>た」という後者の全面的反論を招来して終わった論争である。しかしこの論争も、その実態はといえば、トゥールのグレゴリウス Grégoire de Tours が著わした『フランク人の歴史』の解釈をめぐるものであり、したがってブルドーのような歴史の認識論に関わる議論ではなくて、史料批判や考証のカテゴリーに属する議論であったのである。

## (2) シヤルル・セーニョボス

このような学問状況を勘合すれば、フュステル・ド・クラランジュのモノーへの反論「歴史的テキストの分析について」と同年(一八八七年)に公表された「歴史における認識の心理学的諸条件」<sup>(39)</sup>の先見性が、理解しうるであろう。その著者は、三三歳のソルボンヌの講師、シヤルル・セーニョボスであった。のちに第二世代の実証主義史家の大御所となる、あのセーニョボスである。かれは、一八八二年に『一三六〇年までのブルゴーニュの封建制——中世フランス地方の社会と諸制度の研究』<sup>(40)</sup>——によつて博士号を取得し、八五年から八六年にかけて、女学校用の歴史教科書を執筆したところであつた。<sup>(41)</sup>そして、歴史学の認識論へと研究を進めたのであつた。このように、セーニョボスは、歴史認識の科学性の問題を自己の課題とした稀有な歴史家の一人であつたのである。

セーニョボスが「歴史における認識の心理学的諸条件」のなかで述べたことは、かれ自身、断り書きしているように、歴史の構成方法という総合に関わる事柄ではなくて、科学的な歴史認識の方法、すなわち、ドキュマン document の取り扱い方法や、ドキュマンから歴史的事実を抽出する際の諸注意という分析に関わる事柄であつた。

このセーニョボス論文が、いくつかの限界をもっていることは自明である。第一に、心理学主義である。「歴史認識は、心理学的認識である。」(p.9)「歴史学は心理学の応用である。」(p.28)「歴史家は、心理学者たるべきである。」(p.171)のような表現が、随所に見られる。セーニョボスが歴史認識の基礎づけを心理学に求めたことについては、当時の社会科学のなかで、心の物理学たる心理学が占めた位置からして理解しうることなのであるが、その心理学は、実験心理学ではなくて、内観心理学という主観の心理学であつた。それは、主観的個人中心的な観点から人間行動や社会生活の問題にアプローチする立場であり、社会過程における集合的要素の重要性と実在性を重視するデュルケイミアンの立場とはあいいれなかつた。<sup>(42)</sup>このために、セーニョボスはシミアンの批判に晒されたのである(前節を参照)。

第二に、心理学主義の原因をなすドキュマンの問題である。セーニヨボスが、約一〇年後に「歴史はドキュマンで作られる<sup>(43)</sup>」と記すように、当時、「歴史の真理はドキュマンのなかにしかない<sup>(44)</sup>」というのが、科学的な歴史を志向する実証主義史家の基本テーゼであった。ドキュマン自体が、その制作者の知覚を通じた対象の認識という心理作用の産物であることに鑑み、ドキュマンの解読は、心理法則に依拠せねばならないというのである。そこでかれは、ドキュマンを物理的ドキュマンと心理的（象徴的）ドキュマンの二つに細分し、ドキュマンによってたんなる文書資料のみならず、建築・図像・絵画・信仰・思想なども意味させていたが、実質的には文書資料中心の説明を与えており、のちの記述史料の偏重という狭い歴史理解をばびこらせる一端を垣間見せているのである。第三に、シミアンの言う「構成的仮説」の欠如である。セーニヨボスは、歴史の構成方法について留保したがために、無数の事実群のなかから歴史的事実を選択する規準や歴史家の問題意識には論及しえなかったのである。というよりも、このような「仮説」は問題になりえなかったというのが正しいであろう。なぜなら、当時は、フェステル・ド・クラランジュの主張に見られるように「歴史は、研究者があらゆる先入観から自由であることを要求する<sup>(45)</sup>」とか、「先入見は、テキストを正反対に誤読させるほど、研究者の眼を曇らせる」という考えが支配的であったからである。

セーニヨボス論文には、以上のような限界があるが、かれがやはり、実証主義の時代の子であったことを看過するわけにはいかない。かれの思考枠組は、「個は筆舌に尽くしがたい」（ゲーテ）という歴史主義ではなくて、事実を集め、事実を関係づけるという実証主義である。それはかれが、歴史というものを、史料研究から得られる「事実」とこれらの事実を結びつける「法則」の二要素から成りたつと考えていることや（p. 11）、「歴史精神の全要素の内、最も不活発な要素は、科学的精神、すなわち、個々の事実から法則を探究する願望である」（p. 177）と述べているところに窺知しうる。ただし、ここに言う「法則」が歴史法則といった代物ではない点に留意すべきであろう。セーニヨ

ボスは、歴史は固有の法則をもたず、他の諸科学が歴史に提供する法則を援用するにとどまると述べているからである(p.27)。他のディシプリンに対して開放的である点は、注目してよい点であろうが、セーニョボスはシミアンほど歴史学の科学性について楽観的ではなく、歴史認識は、帰納・アナロジー・比較等に基づく推論によって得られる間接的認識でしかない<sup>(46)</sup>と結論するのである(pp.13ff, p.178)。そして一〇年後には、セーニョボスは「歴史は観察の科学ではなくて推測の科学である」と断言して、フェステル・ド・クーランジュとは距離をおくのである。

最後に、初期のこの論文のなかで、セーニョボスが「事件史」をどう考えていたかを示す一文に言及しておきたい。かれは、「事件史」を確実性に欠けるものと考えていたようである。それはかれが、考古学→古文書学→音声学→文法学→芸術史→宗教史→法制度史→事件史の順に確実性が減ってゆくと見ているからである(p.26)。それだけ一層、セーニョボスは印象的記述を回避し、確実性をより高めるものとして、史料批判の方法の練磨に精進し、事実探求方法としての歴史の方法を、定式化することになるのである。ラングロワと共著の『歴史学入門』(一八九八年)の三分の二が、史料の内的外的批判にあてられているゆえんである。またセーニョボスが、通史の執筆に精力的であったことを勘合すると興味深いことは、「公衆は個々の事件の物語を要求する。歴史家は公衆にそれを与えるべく努力する」(p.17)と述べていることである。学位論文を執筆して以降、実証的歴史研究から離れ、歴史教育や歴史学方法論に関心を移し、通史しか執筆しなかったセーニョボスのモチーフを暗示する一文と言えないであろうか。

### (3) ポール・ラコンブ

如上の諸特徴をもつセーニョボス論文が発表されて七年後の一八九四年に、ポール・ラコンブは『科学として考えられた歴史について』という浩瀚な書物を世に問うた。<sup>(47)</sup> ジョルジュ・ルフェーヴルが、その購読をおおいに推めた本

である。<sup>(48)</sup>この年のドイツでは、ヴィルヘルム・ヴィンデルバントが、「歴史と自然科学」という有名な学長就任講演をシュトラスブルク大学でしている。一八九四年という同じ年に、フランスでは自然科学的な方法を歴史に導入しようという主張がなされたのにたいして、ドイツでは文化科学と自然科学の峻別という対蹠的な主張がなされていることに注意しておこう。

さて、ラコンブのライトモチーフは、科学的な歴史学の諸条件を探究することであつた。かれ自身「科学的な歴史学を構築することは、現代の課題である」(p. XI)と述べている。考証を通じて集められた諸事実を科学的一般化によって関係づけること、諸現象を原因によって説明するための諸条件を探ることが、かれの目的であつたのである。このため、歴史にもある種の予測機能が期待されずらする(pp. 369-370)。このような問題意識をかれがもつにいたつた背景には、社会学の発達と歴史学の窮状という状況があつた。かれが依拠するのは、歴史のなかに規則性・類似性・因果関係を探究せんとするデュルケイミアンと同一の立場である。<sup>(49)</sup>かれは、このような自然科学的な科学観に立脚して、当時の歴史学を批判したのである。かれの見るところ当時の歴史学は、無益な考証に墮し、「全体概念」からまします遠ざかり、「世界と人間についての認識を前進させない」ものであつた。しかしかれが、「考証のない歴史はない」と考証の重要性を指摘している点を看過すべきではない。かれが考証的歴史を批判したのは、考証が「歴史的現実」を明かしはするが、それだけでは「歴史的真理」を構築しえないと考えるからである(以上、pp. IX-XI)。

そこでラコンブは、「歴史的真理」を構築するための方法の考察に進むのである。かれが依拠したのは、セーニョボスと同じく個人中心的な心理学の方法であつた。かれもすべての社会問題は、個人の行動の分析に還元しようと考えたのである。かれが過去の人間行為の説明原理を心理学に求めたのは、「人間の恒久的動機と知性の恒常的方法こそが歴史の原因である」(p. 52)とか、「社会学的現象は、まず心理学用語で表現されるはずである」(p. 34)というかれの

見解に基づく。かくして動機の解明は、心理学に託されることになる。人間が生物学的類似性のほかに心理学的類似性をもつことを心理学は明らかにしたからである。すなわち心理学は、人間の行為を決定する本能的欲求を明らかにし、人間が同一の方法によって、感覚や知覚を形成し、記憶を呼びもどし、想像力を作りあげて示したからである (p. 4)。現象間の類似性を確認し、因果関係を探究することが、かれの考える科学の方法であった。そこで、心理学的類似性の究明を軸にして、過去の人間行為を科学的に説明しようというのが、かれの基本的な考え方となるのである。したがって心理学は、歴史学に説明方法や歴史的証言の真実性についての規準を与え、逆に、歴史学は心理学に心理学を正確にし豊かにする諸事実を与えるという主張が生まれるのである (pp. 12-13, 26-28)。かれは、心理学と歴史学とのこの相補的關係が、考証家はもとより多くの社会学者によっても否認されてきたことを批判し、心理学によって基礎づけられる「普遍的人間 l'homme général」モデルによって、歴史の方法を語ろうとするのである。したがって、テーヌのように種族理論によって歴史現象を説明することを、ラコンブは拒否するのである (pp. 307-327)。

ラコンブは立論の前提として次のような考えを提出する。それは、人間行為の三類型とその行為から生まれる二種類の事実を区分する考え方である。まず行為の三類型とは、人間の行為は、普遍的 général、一時的 temporaire、特異のないし個体的 singulier ou individuel という三重の性格をもつという指摘である。そしてこの三種類の行為をなす人間を、①普遍的人間、②一時的人間、③個体的人間と類型化するわけである。普遍的人間は、心理学によって抽出される理念型であり、現実の歴史のなかでは一時的人間として現出する。この普遍的人間と一時的人間の行為こそが、科学的な意味における原因の対象たりうるものであり、個体的人間は、原因になりえず、考証ないし物語史の対象となる。次に二種類の事実というのは、特異で反復しない事実と、類似性を示し将来の発展に影響を及ぼす事実のことである。かれは前者の事実を「出来事 Événement」、後者の事実を「制度 Institution」と名づけた。かれは歴史的現

実を、この二種類の事実の絡みあいとして把握するのである。したがって「歴史は類似性が提示されるに依じて科学と考えられる」と述べる著者が、「制度」の研究に集中せよと主張するのは必定であろう。かれにとって「出来事」は、新しい「制度」の産出に寄与しない限り、科学的取り扱いになじまないからである（以上、pp.3, 7, 9-13, 52）。このような道具だてのもと、ラコンブは歴史学の科学性を論証しようというのである。

歴史の方法としてラコンブが強調するのは、演繹の使用である（以下、pp.54-55, 61-64）。つまり仮説概念の積極的利用である。しかも事実による論証という義務を伴う仮説である。かれは、実験に適さない歴史学の唯一の方法は観察であるが、仮説概念がなければ観察もなしえないと断言する。この点は、セーニヨボスには欠落していた点である。シミアンの言う「構成的仮説」、リュシアン・フェーヴルの「問題提起」<sup>(50)</sup>、アンリ・ベールの「総合」と同じものと言いうる。ラコンブは、観察するということは、現象の無限の多様性を前にして不可欠な原理である消去と選択の原理によって、ある地域やある局面に視線を集中することであり、この原理は仮説によってのみ与えられ、この仮説こそが、視野を限定させ、特定の方向にのみ目を向けさせるのであると主張するのである。そして物理学すら仮説を用いていると述べて、現象をありのままに観察し記述することから科学は出発すると考える誤った科学観を批判したのである。この批判は、明示こそしていないが、歴史家は己れを消去してありのままの事実を観察し記録するというランケ的方法への、素朴実証主義への批判であることについては多言を要さないであろう。ラコンブが、歴史叙述における歴史家の主体、歴史家の役割というものを肯定し、歴史家の実際の仕事のあり方、作業工程を露にしたことは重要である。これまで無視されてきたがゆえに、かれは演繹を重視したのであるが、かれも帰納を否定するわけではない。帰納の方法も歴史に適用可能であるけれども、演繹の契機を結局は必要とするというのである。つまり、歴史的類似性を引きだし、それを結果として検討しつつその原因を探求しようとするときに、多くの前件のなかで、どれが結果



であり、どれが原因であるかを知るためには演繹的考察を必要とするというのである。

具体的な作業手順としては、歴史という「事実の無限の海原」から「出来事」を除去し、類似性をもつ「制度」を抽出したあとで、「制度」の原因をデュルケームのように社会のなかではなくて人間のなかに見いだし、各々の「制度」を「心理的諸力 *forces psychiques*」に結びつけ、ときにはルヌーヴィエ *Renouvier* の言う「想像力による実験」 *expérience imaginaire*」を用いて、歴史を説明することになるであろう (pp. 64-66)。「あらゆる制度は心理的諸力の創作物である」 (p. 132) と述べるラコンブが、心理学を重視するのは必然である。

しかしラコンブは、歴史学の科学性に楽観的であつたわけではない。かれも偶然を決して無視するのではなく、個体的人間の行為が、歴史に偶然を導入することを認めているからである。帰納や演繹を用いて心理学的説明を与えても、「完全な因果関係を復元する希望は妄想であり、結果の説明は必然的にきわめて不完全のままである」ことを、かれは自覚しているからである (pp. 250-252)。もともとラコンブは偶然の問題を自覚してはいても、それを自己の理論のなかに整合的に組みこみえていないのであるが。

ともあれラコンブの著書が、当時、成長しつつあつた社会心理学 (スペンサーやタルドの業績に負う) の影響下にある、論理がときに粗笨に流れている面はあるものの、仮説をもたず、たんなる事実学と化した史料実証主義への批判となつてゐることは明らかである。かれの立場が、コントや J・S・ミルにつらなる本来の意味での実証主義であつたことも同様に明らかである。このように、基本的にはデュルケームと同一立場に立ちながらも、かれが社会現象を、経済的・生殖的・共感的・名譽的等の心理学的概念で説明しようとした点は、両者を分かつ点であり、歴史家はもとより社会学者によつても、かれの理論が受容されなかつた理由でもある。セーニョボスは『歴史学入門』(一八九八年)のなかで、ラコンブの著書を、ここ三〇年ほどの間に出版されたもののうちで「最も重要な独創的著作」

であることを認めたが、過度の一般化を批判し、事実の分類についても「哲学的見地からは非常に当を得ているが、歴史家の実際的な必要を満たすものではない」と苦言を述べるのである。<sup>(51)</sup> それでも本書が歴史理論の領野に与えた波紋は大きく、それは余波となつて、その後の議論の態様を規定することになる。本書が出版されて二〇年以上もあとに、実証主義史家の一人であるラングロワが「歴史の一般理論は、いかなる職業的歴史家によりもポール・ラコンブ氏に多くを負つており、かれの明晰な思考は、あちこちの銜学的水車を回転させる水流である」と述べ、さらにラコンブと伝統的歴史学への批判を共有するH・ベールが、ラコンブを「歴史科学の理論家」と呼んで讃えたところにも、それは表われている。<sup>(53)</sup>

#### (4) A・D・クセノポール

ラコンブの著書が出版されて二年後の一八九六年に、ガブリエル・モノーが、ある講演のなかで、大事件や偉人の歴史から制度や社会経済的な歴史への転換を語つたが、<sup>(54)</sup> ラコンブへの本格的な反論は、フランス国内からは現われなかった。既述のように『歴史学入門』<sup>(55)</sup> は、ラコンブについて五箇所で注記したのみであり、ラコンブの進歩や種族に対する考え方に共感を示しはしたが、<sup>(56)</sup> 実際の歴史家の仕事には役立たないというのが『歴史学入門』の著者たちの考えであつたようである。それというのも『歴史学入門』は、ラコンブが対象とした歴史の認識論的問題をテーマとせず、あくまでも史料批判の方法を中心に、歴史叙述のイロハを論じた本であつたからである。<sup>(56)</sup> ラコンブの著書に対する認識論レヴェルでの反論は、フランス人によつてではなくて、仏独両国の歴史学や哲学に精通しているルーマニア人の手によつてなされた。モノーが創刊した『史学雑誌』の「歴史報告 Bulletin historique」欄の寄稿者でもあつたクセノポールが、一八九九年に『歴史の基本原則』<sup>(57)</sup> を著わしてラコンブに応じたのである。

クセノポルの目的は、これまで歴史家によって無視されてきた過去の科学的な認識原理を探究し、樹立することであつた。かれは、歴史学が進歩するためには方法の無視は有害であり、「研究を導く原理の欠如は科学に重大な損害を及ぼす」と考えるのである(pp. I-III)。しかるに、現状はどうであろうか。クセノポルは、以下のように総括している。歴史家は方法の省察を好まず、歴史学の諸原理についての考察は、哲学者や博物学者に任されてきた(既述のムージユオル、ルイ・ブルドーやラコンブも、専門的な歴史家ではなかったことを想起しよう)。ところが哲学者の考える歴史論には、歴史の科学性を否定するものが多かった。ショーペンハウアーも、体系を欠く歴史学は科学ではないと記している。哲学者は、物理学などの自然科学の原理を歴史に適用して、歴史が科学的方法を欠くと結論したのである。かれらの言う科学概念は、「一般概念の体系」ないし「普遍的真理の体系」のことであつた。セーニョボスすら、このような議論の影響を受けて、歴史の科学性に疑念を示し、ある書物のなかで、「歴史は未発達な科学である」(『現代ヨーロッパ政治史』一八九七年)と自嘲的に語つたのである。反対に、歴史の科学性を肯定する論者も、自然科学の科学観を前提としていた。その考え方は、歴史は一般性によって科学となるのか、歴史は法則定立能力を示すことによって科学と認められるというものである。一八世紀末のコンドルセや、「社会現象は科学的予測を含む真の自然法則に不可避的に従う」と述べたコントを始めとして、その理論をイギリス史に応用したヘンリー・T・バックル、「歴史の説明は必然の発見と偶然の除去である」と考えるヴィルヘルム・フォン・フンボルト、そして同様の考えを近年示したブルドーやラコンブにいたるまで、皆、然りである。クセノポルは、勿論、歴史学の科学性を論証せんとする陣営に属するのであるが、歴史は自然科学をモデルとしなくても科学たりうるというのである。「普遍的真理の体系」という科学の定義に基づいて歴史現象を論ずることは、歴史学が対象とする知の性質からして、不十分であると主張するのである。なぜなら、クセノポルにとって歴史の一般性や歴史の真理とは、「限られた一般性」・「個体的真理」

でしかなく、歴史科学の因果関係も、個性性や一回性を特色とするからである。このような考えの背後には、異論のない普遍的真理のみならず、蓋然的真理や仮説をも科学のなかに包摂させるというかれの科学観があるのである（以上、pp. 23-32）。

それでは、クセノポルは哲学者たちの誤りがどこにあると考えたのであろうか。クセノポルはその原因を、哲学者たちが「空間」と「時間」に由来する二種類の事実を混同していることにみると見た。かれにとって、「空間」と「時間」は重要な概念である。かれの科学観を支える二本の柱と言ってもよい。かれにとって空間と時間は、悟性的認識によって得られる先験的カテゴリーではない。それは現実的かつ實在的であり、知性によって覚知され抽象された形相である。空間と時間のなかでこそ、森羅万象は位置づけられる。この基本概念がなければ、歴史も「巨大な幻影」と化するのである（p. 1, p. 12）。そこでクセノポルは、空間と時間によって諸現象を整理しようとする。事実を二分し、空間に関する事実を「共存的事実 *les faits coexistants*」（なお第二版では、「反復的事実 *fait de répétition*」と変更した）、時間に関する事実を「継起的事実 *les faits successifs*」と命名した。共存的事実とは、反復し、時間の経過によっても左右されない不変の事実である。それに対して継起的事実とは、時間とともに変化し、差異を特徴とする事実である（pp. 12-15）ラコンブの「制度」と「出来事」、ブルドーの「関数」と「出来事」という事実の二分法と相似した分類と見なすこともできる。クセノポルはこの区分を土台として、学問を空間的な共存現象を扱う「理論科学」（物理学・化学・天文学・生物学・心理学・論理学・経済学・法学・社会静学）と時間的な継起現象を扱う「歴史科学」（地質学・古生物学・政治史、<sup>58</sup>経済史、文学史、天文学史などのあらゆる歴史学）に二分する。そして二種類の科学は、方法を異にするのみならず、理論科学は法則の定立、歴史科学は因果関係の樹立というように到達する結果も異になると述べて、歴史的継起のなかに未来を予測する法則を樹立しようと信じる社会学者を批判し、歴史学の方法を次の

ように結論づけるのである。「歴史学は特殊で特異な科学ではなくて、世界を概念化する二つの方法のうちの一つ、すなわち継起的方法である。」(pp. 19-21) つまり歴史は科学ではあるが、社会学のような一般法則の発見を目的とする科学ではないのである。クセノポルは、より明瞭に述べている。「歴史は、時の流れのなかで互いに連繋している諸事実の単線的な継続を探究する。……歴史科学が、共存的事実を支配する法則と類似した法則にその説明を還元することを望むことは、この科学の特性を完全に無視することである。歴史科学は類似と共存の関係ではなくて、差異と継続の関係を打ちたてることを目的としたのである。」(p. 26) これは歴史に、規則性や法則性を求めようとするラコンブやデュルケーム・ミアンへの批判でもある。クセノポルにとって、歴史は何よりも継起的な因果関係の科学であり、「共存的事実の科学は現象の原因を洞察しえないが、継起的事実の科学にとっては、原因の発見は主要な属性である」(p. 28) のである。したがって過去の事実に関する真理とその因果関係の発見を目的とする歴史学は、科学のなかに位置づけられるのである (p. 69)。

それではクセノポルは、何に基づいて原因を説明しようというのであろうか。セーニョボスとラコンブが心理学に依拠したのに対して、クセノポルは進化論的な生物学に依拠した。もとよりこの区別は厳密なものではない。というのも、当時は社会心理学の揺籃期であり、社会心理学は、心理学・社会学・生物学・生理学などが重複しあう領域を研究対象としたからである。クセノポルの方が、生物学の概念を援用する傾向がより強いというにすぎない。それはかれが、テーヌやG・ル・ボンから示唆を得たことであろうが、ラコンブやバックルよりも、民族性(国民性)の形成にとって「種族」と「環境」の影響が大きいことを述べ、さらに人類史の発展を、「自己保存の本能」・「生存競争」・「進化」・「模倣」などによって説明しようとするところに窺知しうるのである (pp. 72-75, 131-153)。クセノポルはこのような基本概念によって、すなわち、デュルケームが批判したタルドの「発明—模倣」理論によって歴史を説明す

るのである。歴史の発展や進歩は、個人の天才による発明と文化によるその模倣の結果である。個人が革新を生みだし、大衆は自己保存の可能性を高める革新を模倣し取りいれる。かくして「歴史における個人の役割」とか、いかなる法則にも従わない「偶然」が重視され、「個人」と「偶然」は「歴史発展の決定的な二要素」と主張されるのである(pp. 153-166)。クセノポールは法則に匹敵する「系列 *série*」という概念を考案しはするが、基本的には偶然によって歴史を説明するのである。このような歴史観の帰結は、政治史の優位である。クセノポールは、「国家史は人間社会の全般的な歴史 *l'histoire générale* である」とか、「歴史の中軸と考えられる政治史」という見解を述べている(p. 294, p. 296)。

以上に見てきたように、『歴史の基本原理解』は、仏・英・独三国の基本文献を渉猟した歴史家による「歴史理論」(第二版のタイトルである)の書であった。本書には、生物学的な「多様な諸力の作用の結果である現象の継続」を「歴史系列 *la série historique*」と定義し(p. 272)、この「歴史系列」によって継起的事実にアプローチするというユニークな主張も見られるが、本書は全体の構成にまとまりを欠き、体系的とはいえない著作であった。このため本書は、第二版で大幅な増補改訂をよぎなくされるのである。法則を究明する「理論科学」と発展の因果を究明する「歴史科学」という分類が、リッカートやヴィンデルバントの分類を類推させるとはいうものの、クセノポールには歴史的知識と価値自由といったリッカートたちを悩ませた問題は眼中にはなかった。<sup>(59)</sup>クセノポールは基本的には、H・スペンサーやG・タルドの生物学的で原子論的な方法論と新カント派を彷彿とさせる方法二元論に基づいて「歴史理論」を構築しようとしたが、かれはシミアンが批判した政治・個人・年代学という「三つのイドラ」に囚われた伝統的歴史家であったのである。『史学雑誌』は同僚の著書について短い好意的紹介を載せたが、<sup>(60)</sup>クセノポールの「歴史理論」は、P・ラコンブやH・ベールによって完膚なきまでに批判されることになる。

クセノポールによって批判されたラコンブは、ただちに長文の反論を『歴史総合評論』の創刊号に発表した。<sup>(61)</sup>先述し

たようにラコンブとクセノポルは、科学的歴史を樹立するという壮図を共有しつつも、前者は類似性と反復性を重視し、後者は差異と一回性を重視するというように、その考え方は対蹠的であった。例えば、クセノポルが歴史はモムゼンやフステル・ド・クラランジュの方法で完全に科学的であり、事実は証明されるや科学的事実となると考えるのになんて、ラコンブは最良に証明された現実といえども、それは科学ではなくて科学の素材でしかなく、類似性によつてのみ科学は作られると考えるのである(pp. 28-29)。このようにラコンブの反論は、クセノポルの科学観を始めて、種族観・法則観・進化論・時間概念など多岐にわたっている。反論の骨子は、『科学として考えられた歴史について』のなかで主張されたものばかりであり、ラコンブが生物学ではなくて心理学や社会学の理論に依拠していたことを想起すれば理解しうると思われる。したがって反論をこれ以上要約する愚は、犯さないことにする。ただこの反論のなかで、ラコンブがクセノポルを「外交的政治的事件史しか念頭にない旧派に属する歴史家」と断言し、その論理的根拠を、クセノポルの「単線的な諸事実の継続」という歴史観のなかに見いだし、この歴史観こそ「事件史の公式」であると剔抉したこと、および、旧派の歴史家が生物学の理論を語るとは奇妙であると諧謔もまじえ、法則を求めるべきは進化論のなかにはなくて心理学であると述べていることを特筆しておきたい(p. 28, p. 33, p. 37, p. 48)。

おそらくラコンブの反論に刺激されてのことであろうが、クセノポルは自己の歴史理論をより精緻なものにする努力を即座に開始し、その成果は次々と『歴史総合評論』に掲載された<sup>(62)</sup>。これに基づいて改訂されたのが、第二版『歴史の理論』であり、G・モノーは身内意識も手伝ってか、この第二版を「今日、この題材について存在する最も完全で最も明晰な著作」であると評価した。<sup>(63)</sup>しかしベールは、この第二版をとりあげて、「クセノポルの著作が近年における歴史理論への最も重要な貢献である」ことを認めつつも、クセノポルが「事実を説明することよりも事実を陳列す

ることに夢中な物語的で経験的な伝統的歴史を保守」する『歴史のための』歴史の理論家」でしかなくことを批判するのである。<sup>(64)</sup> なぜならベールは、ラコンブと同じく「物語史は科学ではない。考証は科学の基礎ではあれ、科学ではない。一般的なもののしか科学ではない」(p. 51) と考えるからである。したがってクセノポールが「発展の指導原理」であり「歴史の鍵」と呼ぶ系列 *série* についても(ベールは、系列は一般的事実たる社会的事実を連結させ、人間の経済的・政治的・社会的・宗教的等の欲求に対応する精神生活の一般形態を通じて現われ、種族・国民性・遺伝・環境といった一般的要因によって支配され、進化・生存競争・模倣・個性・偶然などの諸力によって推進されると要約しているが)ベールは、この「系列概念は曖昧」であり、「歴史的現実をその原初的要素に分解せず、有機的な歴史学を構成しない」と述べるのである(pp. 38-39)。また別の箇所ではベールは、歴史系列の研究は、生物学ではなくて、偉人や歴史的危機についての心理学に達するはずであり、歴史における知的要素の演ずる役割の問題を明らかにするのは、心理学の問題であると記すのである。<sup>(65)</sup> このようにクセノポール批判のなかで、「原因の研究においては心理学的方法しかない」(p. 41) と記し、「原因の本質的な多様性」(p. 35, p. 54) を強調するベールが、個々の有機体の特殊性を無視する生物学的方法を承認しないのはコロラリーである。

以上のように、ドイツの歴史家と言えばディートリッヒ・シェーファーと類似した立場をとり、ラコンブやベールから伝統的歴史家と批判されたクセノポールではあったが、それでも『歴史の基本原理』は、歴史を科学と呼ぶ根拠を歴史家自らが明らかにしようとした書物であった点は、概して歴史家がこのような問題に無自覚であるがゆえに、十分、評価されてよいであろう。

(1) Paul Lacombe, *L'histoire considérée comme science* (Paris, 1894), Henri Berr, *La synthèse des connaissances et l'histoire* ;



- essai sur l'avenir de la philosophie (Paris, 1898)., Ch. Langlois et Ch. Seignobos, *Introduction aux études historiques* (Paris, 1898)., A.D. Xénopol, *Principes fondamentaux de l'histoire* (Paris, 1899).
- (2) Victor Karady, "Durkheim, les sciences sociales et l'Université : bilan d'un semi-échec," *Revue française de sociologie*, XVII No. 2 (1976), 273.
- (3) デュルケームも述べるように「sociologie」なる語が市民権をえて学界で公認されたのは、ずっとこのことである。フランスで初めて社会学講座を設けたのは、ボルドー大学であるが、その正式の講座名が science sociale et éducation であったことの意味は重要である。デュルケーム『モンテスキューとルソー』小関・川喜多訳(法政大学出版局、一九七五年)第II部。田原音和『歴史のなかの社会学』(木鐸社、一九八三年)第一・二章。cf., Philippe Besnard ed., *The Sociological Domain. The Durkheimians and the Founding of French Sociology* (Cambridge, 1983).
- (4) 一九〇三年一二月に、社会学と隣接諸科学との関係をめぐって連続講演が開かれた事実は、デュルケームの闘いが承認され、「社会学」が公認されつつあることを示している。主な報告者は、デュルケーム、タルド、セーニョボス、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ、ギュスターヴ・ランソンなどである。「La sociologie et les sciences sociales," *Revue internationale de sociologie*, 12<sup>e</sup> année, 1904.
- (5) デュルケームと歴史学との関係を分析したものに、Robert N. Bellah, "Durkheim and History," in Robert A. Nisbet ed., *Emile Durkheim* (New Jersey, 1965).がある。スチュアート・ヒューズも述べるように、デュルケームの社会学理論それ自体は、「非歴史的」、「静態的」であり、「過程」よりも「構造」を重視するものであった(S・ヒューズ『意識と社会』生松敬三・荒川幾男訳、みすず書房、一九七〇年、一九四頁)。「歴史的事実や社会の進化にたいする関心ならばともかく、かれ(デュルケーム)の社会学理論が社会の歴史の変動把握の視点をはたして内在させていたかどうか」(宮島喬「社会学的実証主義の思想構造」『思想』五六五号、一九七一年、三六頁)と疑問が出されるゆえんである。なお近年、デュルケームと歴史を論じた文献に、中嶋明勲「E・デュルケームの歴史についての視角とその背景」『研究年報』(愛知教育大学、三五号、一九八六年)があるが、この論文には、上述したような視点は無いように思われる。中嶋氏には、少なくとも、宮島喬「フランス社会学派と集合意識論」(『思想』六六三号、一九七九年)の論点をふまえた展開を期待したい。
- (6) Emile Durkheim, "Préface," *L'Année sociologique*, séries I, t. I 1896-1897 (1898), p. III.
- (7) *Ibid.*, p. V.

- (8) *Ibid.*, p. III.
- (9) *Ibid.*, p. II.
- (10) デュルケーム「一九世紀におけるフランスの社会学」『モンテスキューとルソー』所収、二〇二頁。
- (11) *L'Année sociologique*, I (1898), p. II.
- (12) デュルケーム『社会学的方法の規準』宮島喬訳（岩波文庫、一九七八年）二一九頁。
- (13) Boyer, Croiset, Durkheim et al., *La vie universitaire à Paris* (Paris, 1918), p. 16.
- (14) デュルケーム「社会学とその学問的領域」『モンテスキューとルソー』所収、二五〇頁。
- (15) E. Durkheim, *Cours de science sociale, leçon d'ouverture* (Paris, 1888), pp. 28-29. 邦訳「社会学講義」『モンテスキューとルソー』所収、一九一〜一九二頁。なお邦訳の表記を一部改めたことを断わっておきたい。
- (16) Philippe Besnard, "L'imperialisme sociologique face à l'histoire," in *Historiens et sociologues aujourd'hui* (Paris, 1986). 田原音和、前掲書、一二頁。杉山光信「『社会学年報』から『経済社会史年報』へ」『思想』六八八号（一九八一年）一六三頁。デュルケームの「社会学主義」は、『社会学年報』の創刊号では婉曲的にしか表現されていなかったが、第二巻では、「社会学の緊急の仕事」として、「特殊諸科学を社会学の諸部門とすべく努める」ことを明記していた。Durkheim, "Préface," *L'Année sociologique*, II 1897-1898 (1899), p. II. さらに第六巻では、歴史学が「社会学の一部門となる」ことが述べられた。*L'Année sociologique*, VI (1903), 124. この時期の社会学について、リュシアン・フェーヴルは次のように記している。「社会学は、若くて、活動的で、発育盛りの学問である。若い学問としての乱暴さを持ち、野心を抱いている。」(Lucien Febvre, *La terre et l'évolution humaine*, Paris, 1970, © 1922, p. 32. 飯塚浩二訳『大地と人類の進化』上巻、岩波文庫、一九八七年版、五九頁。)
- (17) *L'Année sociologique*, V 1900-1901 (1902), 123-127.
- (18) 以上の引用は、Langlois et Seignobos, *Introduction aux études historiques* (Paris, 1898), p. 186, p. 188, p. 279. 高橋巳寿衛訳『歴史学入門』（人文閣、一九四二年）二一七、二一九、三二三頁。なお引用文は、翻訳どおりではない。
- (19) *L'Année sociologique*, II, 142-145.
- (20) カラディは、デュルケーム・ミアンが社会学の科学的正当性を得ることに成功したが、制度的正当性を得ることに失敗したことを「semi-échec」と総括したのである。Karady, *op. cit.*, 306.
- (21) Terry N. Clark, *Prophets and Patrons: The French University and the Emergence of the Social Sciences* (Cambridge, 1973),

- ch. 6, William R. Keylor, *Academy and Community : The Foundation of the French Historical Profession* (Cambridge, 1975), pp. 115-116.
- (22) Georges Lefebvre, *La naissance de l'historiographie moderne* (Paris, 1971), p. 300.
- (23) Paul Lacombe, *op. cit.*, p. VIII.
- (24) ジャン・グレンソンは「歴史における個人の役割に反対する概念を、学界 monde universitaire において勝利させた」五人の先駆者の一人として、シミアンを挙げている。他の四人は、H・ペール、M・ブロック、L・フェーヴル、ジュールジュ・ルフェーヴルである。Jean Glénisson, "L'historiographie française contemporaine," in Comité française des sciences historiques, *La recherche historique en France de 1940 à 1965* (Paris, 1965), p. XI. 邦語文献でシミアンに言及したものとして、宮本又次『フランス経済史学史』(ミネルヴァ書房、一九六一年)一〇〇〜一一九頁。服部春彦「フランス歴史学の転換」河野健二編『ヨーロッパ——一九三〇年代』(岩波書店、一九八〇年)三五〜三五四頁。本池立「前掲論文」一九〜二六頁。シミアンの業績を、今日「いかん評価するかについてのホッナーマンと比べ」Maurice Lévy-Leboyer, "L'héritage de Simiand : prix, profit et termes d'échange au XIX<sup>e</sup> siècle," *Revue historique*, CCXLIII (1970). Jean Bouvier, "Fou François Simiand ?" *Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, 28<sup>e</sup> année No. 5 (1973). ホッナーマンの方法論について B.V. Damalas, *L'Œuvre scientifique de François Simiand* (Paris, 1947). Célestin Bouglé, "La méthodologie de François Simiand et la sociologie," *Annales sociologiques*, Série A, Fascicule 2 (1936), 5-28. Maurice Halbwachs, "La méthodologie de François Simiand : un empirisme rationaliste," *Revue philosophique*, CXXI (1936), 281-319.
- (25) François Simiand, "Méthode historique et science sociale, étude critique d'après les ouvrages récents de M. Lacombe et de M. Seignobos," *Revue de synthèse historique*, VI, Nos. 16-17 (1903), 1-22, 129-157. この論文からの引用は、ページ数を本文中に明記してある。このホッナーマン論文を論じたものとして Jacques Revel, "Histoire et sciences sociales," *Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, 34<sup>e</sup> année No. 6 (1979), 1362-1364.
- (26) Lucien Febvre, "François Simiand 1873-1935," *Annales d'histoire économique et sociale*, VII, No. 34 (1935), 391.
- (27) L. Febvre, *La terre et l'évolution humaine*, pp. 89-91. 邦語「一五〇〜一五二頁」Do., "Histoire, Economie, Statistique," *Annales d'histoire économique et sociale*, II, No. 8 (1930), 585. *Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, 15<sup>e</sup> année No. 1 (1960).
- (28) Henry T. Buckle, *History of Civilization in England*, vol. 1 (London, 1919), © 1857. 第一巻は「個人とその複数の個人から成

りたつ社会も含めた人間行動への心理的・物理的法則の考察にあてられている。H・テーヌ『英国文学史』第一巻、平岡昇訳（創元社、一九四九年版）。この緒論のなかで、テーヌは「種族・環境・時代」という歴史の「本源的な力」について述べている。両者の考察は、本来の意味での実証主義史学を検討するうえで重要である。

- (29) カルボネルのビブリオグラフィヤ、クセノポルの引用文献を参照されたい。Carbonell, *Histoire et historiens*, pp. 17-28., Xénopol, *op. cit.*
- (30) すでにシミアンが一九〇三年に「セーニョボスたちを「方法論学者」と呼んでいた。F. Simiand, *op. cit.*, 134. 最近では「Carbonell, “La naissance de la Revue historique 1876-1885,” *Revue historique*, CCLV (1976), 335., Guy Bourdè et Hervé Martin, *Les écoles historiques* (Paris, 1983), p. 137. が「方法論学派」を使用している。
- (31) Paul Mougelle, *Les problèmes de l'histoire*, 2<sup>e</sup> éd. (Paris, 1902), © 1886., Louis Bourdeau, *L'histoire et les historiens, essai critique sur l'histoire considérée comme science positive* (Paris, 1888). これらの文献からの引用は、それぞれ本文中にページ数を明記しておく。
- (32) Xénopol, *op. cit.*, pp. 50, 74, 83, 85, 92-94, 104, 110, 241.
- (33) もっともブルドーは「熱狂的なコントの崇拜者ではなくて、ときにはコントの批判者であり競争相手でもあった。W.M. Simon, *European Positivism in the Nineteenth Century: An Essay in Intellectual History* (New York, 1963), pp. 105-106.
- (34) もっともブルドーも「統計による歴史が物語史ほどの魅力をもちえないことを認めている。それでもなおかれが統計の利用を主張する背景には、「科学は人を楽しませることではなく、人を教育し、人に奉仕することを使命としている。……われわれは、真と美の間で選択せねばならず、躊躇することなく真を選ぶ」という科学観があるのである。Bourdeau, *op. cit.*, p. 321.
- (35) Carbonell, *Histoire et historiens*, pp. 402-406., Do., “L'histoire dite positiviste en France,” 180-182., Do., “Histoire narrative et histoire structurelle,” 154-156.
- (36) Langlois et Seignobos, *op. cit.*, p. 238. 邦訳「二七七頁。セーニョボスは「ブルドーが歴史を一連の統計に還元したことを批判した。」Xénopol, *op. cit.*, pp. 25, 157-158, 164-165, 203-204, 206-207, 247, 331., Lacombe, *op. cit.*, Simiand, *op. cit.*, Henri Berr, “La méthode statistique et la question des grands hommes,” *Nouvelle Revue* (1890), 519-527, 724-746., Berr, *La synthèse en histoire* (Paris, 1953), pp. 66-67., Berr, *La synthèse des connaissances et l'histoire* (Paris, 1898), p. 422.
- (37) Gabriel Monod, “Les aventures de Sichaire,” *Revue historique*, XXXI (1886), 259-290., Fustel de Coulanges, “De l'analyse des

- textes historiques," *Revue des questions historiques*, XLI (1887), 5-35.
- (38) *Ibid.*, 33. 念のために一言すれば、フュステル・ド・クラランジュも「比較」を拒絶するのではない。かれは、テキストを分析しないで注釈する新しい方法は、歴史学の未来にとって危険であると述べてはいるが、「比較」の必要性も認めていた。かれによれば、テキストの「分析」とは、テキストの逐語的な詳細な研究、すなわち、テキストの諸要素を検討し、語義を確定し、テキストの作者の真の考えを引きだすことであつた。かれは何よりもテキストの「分析」を重視し、そのあとで他のテキストとの比較対照を行なえばよいと主張したのである。以上、*Ibid.*, 5-6, 32-35.
- (39) Charles Seignobos, "Les conditions psychologiques de la connaissance en histoire," *Revue philosophique*, XXIV (1887), の論文からの引用は、本文中にページ数を明記しておく。この論文を要約したものが、一八九八年に出版された『歴史学入門』の第二編第一章「歴史知識の一般的条件」である。なお『哲学評論』のこの巻には、デュルケームもドイツ留学の報告である *La science positive de la morale en Allemagne* を三回にわたって連載している。
- (40) イッガースは「セーニョボスの学位論文すら、国家についての広義の社会史への興味深い寄与である」と述べて、この学位論文が、ギゾー、トクヴィル、フュステル、テーヌなどの社会史の伝統に連なるという見解を示している。Iggers, *op. cit.*, 25.
- (41) Gordon H. McNeil, "Charles Seignobos 1854-1942," in S. William Halperin ed., *Essays in Modern European Historiography* (Chicago, 1970), 354-356.
- (42) この時代の社会心理学をめぐる状況については、F・B・カープ『社会心理学の源流と展開』大橋英寿監訳(勁草書房、一九八七年)参照。
- (43) Langlois et Seignobos, *op. cit.*, p. 1. 邦訳「三頁」。この箇所の邦訳は英語版 *Introduction to the Study of History* (New York, 1898), p. 17. からの重訳である。
- (44) Fustel de Coulanges, *op. cit.*, 5.
- (45) *Ibid.*, 34-35.
- (46) Langlois et Seignobos, *op. cit.*, p. 276. 邦訳三二〇頁。
- (47) Paul Lacombe, *De l'histoire considérée comme science* (Paris, 1894), xiv 415p. 本書からの引用は、本文中にページ数を明記しておく。ラコンブの経歴は、Henri Berr, *L'histoire traditionnelle et la synthèse historique* (Paris, 1921), ch. IV. に詳しいが、それによれば、ラコンブは一八三四年生まれのジャーナリストかつ行政官であり、リセでガンベッタと親交を結んだことが、のち

の経歴に影響している。学業面では、パリの法学部と古文書学院で法学・歴史学・実証哲学などを学んだようである。一九一九年に死去している。本書の出版当時、かれは図書館と古文書館の総監職にあり、仏英両国の小史や『愛国主義』・『武器と甲冑』・『ローマ社会の家族』といった著作を出版していた。ラコンブに言及した邦語文献に、宮本又次、前掲書、九〇〜九一頁、井上幸治、前掲論文、五〜六頁がある。外国語文献では、Bert, *op. cit.*, Keylor, *op. cit.*, pp. 116-121. が有益である。

(48) Georges Lefebvre, *op. cit.*, p. 302

(49) というのはものの、ラコンブが社会学者とは一步、距離を置いている点に注意する必要がある。これまで未開に強い関心をもち、開化した民族を等閑視してきた社会学が、歴史における「偶然的なもの」を無視してきたことを指摘し、「出来事」が「制度」に及ぼす影響にも目を向けるように述べているからである。Lacombe, *op. cit.*, p. VIII, p. 25.

(50) Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire* (Paris, 1953), p. 22. 長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』（創文社、一九七七年）三一頁。

(51) Langlois et Seignobos, *op. cit.*, p. vi, p. 201, p. 240. 邦訳『二・二三三』二七九頁。

(52) Charles Langlois, "Les études historiques," dans *La science française*, t. II (Paris, 1915), p. 88.

(53) H. Bert, *L'histoire traditionnelle et la synthèse historique*, p. 57.

(54) Gabriel Monod, "Observations de M. Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXI (1896), 543-544.

(55) Langlois et Seignobos, *op. cit.*, p. 208, p. 249. 邦訳『二・二三三』二九〇頁。

(56) 実証主義史家のG・モノーやフェルディナン・ロートは、『歴史学入門』を高く評価したが、このモノーやロートの書評と前節に見たパロディの書評とを比較すると、実際の歴史家と社会学者との関心の相違を、これくらい如実に示すものはないと言いうる。G. Monod, "Bulletin historique," *Revue historique*, LXVII (1898), 129-134. Ferdinand Lot, *Recueil des travaux historiques de Ferdinand Lot*, tome I (Paris, 1968), pp. 239-252.

(57) Alexandru Dimitru Xénopol, *Les principes fondamentaux de l'histoire* (Paris, 1899), vi 348p. 本書からの引用は、本文中にページ数を表示しておく。本書に言及したものに、Keylor, *op. cit.*, pp. 121-124. 宮本又次、前掲書、九二頁。井上幸治、前掲論文、九〜一一頁。なお本書の第二版増補改訂版が、Xénopol, *La théorie de l'histoire* (Paris, 1908), viii 484p. である。次に、クセノポルの略歴を記しておく。クセノポルは一八四七年に生まれ、一八六七年から四年間、ドイツに留学し、ベルリン大学で博士号を取得した。一八八三年からヤシ大学の教授となり、二〇世紀初頭には、パリ大学やコレージュ・ド・フランスで講義をしたこともある。ルーマニア史と歴史理論の領域で業績がある。第一次大戦後の一九一九年に死去した (*Revue historique*, XCVIII, 1908, 91

-92. H. Berr, *L'histoire traditionnelle et la synthèse historique*, p. 33.)°

- (58) すでに三〇年以上も前に「エルネスト・ルナンは『地学』を人類史にとって決して無縁な学問ではないうことを示していた。Ernest Renan, "Les sciences de la nature et les sciences historiques," *Revue des deux mondes*, XLVII<sup>e</sup> année, (15 octobre 1863), 763. この論文は「歴史学を自然科学のなかで相対化するエッセーであり、歴史を「諸事実の系列 la série des faits」と定義」(ibid., 761)「クゼンポルの『歴史系列』との親近性を推測させるものである。

- (59) Xénopol, "Les sciences naturelles et l'histoire," *Revue de synthèse historique*, IV (1902), 282-285.

- (60) *Revue historique*, LXX (1899), 240.

- (61) Paul Lacombe, "La science de l'histoire d'après M. Xénopol," *Revue de synthèse historique*, I (1900). 例にふいて「本論文からの引用は『本文中にページ数を明記しておく。』

- (62) Xénopol, "Les faits de répétition et les faits de succession," Do., "Race et Milieu," Both in *Revue de synthèse historique*, I (1900). Do., "Les sciences naturelles et l'histoire," *Revue de synthèse historique*, IV (1902). Do., "La classification des sciences et l'histoire," *Revue de synthèse historique*, II (1901). Do., "La causalité dans la succession," *Revue de synthèse historique*, VIII-IX (1904). Do., "La notion de valeur en histoire," *Revue de synthèse historique*, XI-XII (1905-1906). Do., L'imagination en histoire," *Revue de synthèse historique*, XVIII (1909).

- (63) *Revue historique*, XCVIII, 1908, 91. この第二版は「全章にわたって加筆が施されているが、新たに「因果関係の二重形態」と「歴史における無意識」の二章が加えられ、初版におかれていた「発展の諸法則」と「社会学的法則」の二章が、第二版では「発展の諸法則」にまとめられた。

- (64) H. Berr, *L'histoire traditionnelle et la synthèse historique*, p. 33, p. 39, p. 41. 本書からの引用は「本文中にページ数を明記しておく。」

- (65) H. Berr, "Sur notre programme," *Revue de synthèse historique*, I (1900), 6.

(続 く)